

# 探究のポイント

第5回

このコーナーでは、新学習指導要領のキーワードの一つである「探究」について、「総合的な探究の時間」や各教科の授業で実践していく上でのポイントを、高校での取り組み事例などから見ていく。

今回は、1994年の開校当初から、地域との協働による探究活動を軸とした教育を行っている宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に、「探究」に取り組む上でのポイントについてうかがった。

## 宮崎県立 五ヶ瀬中等教育学校の 「探究のポイント」

- ◆6年間を通じて「郷土探究」「実践探究」「普遍探究」に段階的に取り組む
- ◆3年次の「マイプロジェクト学習」で、地域の課題に対してアクションを起こし、その後の学びにつなげる
- ◆教員自身が地域と深く関わることで、地域の協力を得る
- ◆生徒と教員が日常的に対話を重ね、個々の関心や興味を引き出す
- ◆教科や学年を越えて教員が連携することで、探究の指導を継承

## 全寮制・中高一貫校の特色と中山間地域の強みを活かし 地域密着型の多彩で先進的な探究学習を実践

### 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は、1994年に公立学校としては全国で初めて創設された、全寮制の中高一貫校である。開校当初から、「総合的な学習の時間」を先取りして地域と協働した探究活動（フォレストピア学習）に力を入れ、現在では地域と国際社会をつなぐ「グローバルフォレストピア探究」に取り組んでいる。6カ年教育カリキュラムによる先進的な探究学習の内容と最新の取り組みについて、川越浩校長、研究調査主任の上水陽一先生、研究調査部の鈴木圭介先生にうかがった。

### 宮崎県の山村活用プロジェクトが生んだ 地域密着型の「学びの拠点」

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は、1994年の開校以来、探究活動を主軸とした教育を行っている。探究のテーマを地域の課題の中に見出すという方向性は一貫しており、その理由は同校の創立の経緯と深い関わりがある。

宮崎県は1987年、21世紀へ向けたリーディング・プロジェクトとして県北5町村（高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村）をモデル圏域とする「フォ



川越浩 校長



上水陽一 先生



鈴木圭介 先生

ストピア（森林理想郷を意味する造語）宮崎構想」を打ち出した。「山村の豊かな森林資源をはじめ、古くからの生活や文化などを創意工夫によって有効に活用し、『人間性回復の森林』として、生き生きとした山林を創る」という構想であり、その中の1つ「学びの森ゾーン」の中核として誕生したのが、五ヶ瀬中等教育学校だった。

宮崎県五ヶ瀬町は熊本県との県境に接する山間部。町の主幹産業は農林業であり、面積の8割以上を森林が占め、急峻な地形の中に棚田の風景が点在している。過疎化が進み、1986年に約5,800人だった人口は徐々に減

り、2019年には約3,600人となっている<sup>(注1)</sup>。そのうち約300人が五ヶ瀬中等教育学校の生徒と教職員であり、人口の1割に迫る割合である。

「本校は宮崎県内のほぼすべての市町村から生徒が入学しています<sup>(注2)</sup>。全寮制ですから入学後は五ヶ瀬町民の一員となるわけです。本校では開校以来、目の前にあるさまざまな地域の課題を教育資源として捉え、探究の学びに活かす教育に取り組んできました。町民の多くは高齢者ですが、孫世代である本校生徒との協働はお互いにメリットが大きく、本校の存在が地域に活力と刺激を与えていると、地元の方たちから評価していただいています」と川越浩校長は説明する。

1994年の開校と同時にスタートした「フォレストピア学習」は、中山間地域の豊かな自然に根ざしたローカルな学びを体験的・探究的に行うことで、生徒の主体的な学びにつなげていくというコンセプトであり、「総合的な学習の時間」にもつながる先進的な取り組みであった。そして、スーパーグローバルハイスクール事業（以下、SGH）指定、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」指定などを経て、現行の「グローバルフォレストピア探究」へと発展した。

### ローカルとグローバルをつなぐ 「グローバルフォレストピア探究」

SGH指定期間（2014～18年度）には、「野性味あふれるグローバルリーダー」の育成をめざし、6カ年教育カリキュラム、探究活動の実践、全寮制教育などの特徴と、中山間地域の強みを活かして、国内外の関係機関と連携を図りながら課題研究を軸とした研究開発を行った。SGH指定当時の様子を、研究調査部主任で、自らも五ヶ瀬中等教育学校（当時は五ヶ瀬高等学校）の卒業生である上水陽一先生は、次のように解説する。

「本校がSGHに指定されたとき、『中山間地域の学校がなぜ？』と不思議に思う方も少なくなかったようです。しかし、私たちは長く地域社会の中で探究活動を続ける中で、地域社会の中にこそ、国際社会が抱えるさまざまな課題が内包されているのではないかと思い至りました。そこで、開校以来積み上げてきた、ローカルな課題を探究する『フォレストピア学習』にグローバルな視点を加え、

『グローバルフォレストピア学習』へと発展させました」

2019年度には「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」指定を受け、「地域と共に学び、未来を共に創る地球市民」の育成をめざした取り組みを進めている。県北5町村や近隣の中学校・高校・大学、地域NPOなどと協働した「共学共創コミュニティ」を構築し、SGH事業で構築した探究的な学びを地域で実践し、生徒の社会参画をさらに強化することなどが研究課題である。

研究調査部の鈴木圭介先生は、「推進事業への申請にあたって、地域における本校の在り方や、育成したい資質・能力などに立ち返って議論しました。そして、これまでの本校の歩みの上に、自分たちは何を積み上げていったらよいかと考え、探究プログラムも現在の『グローバルフォレストピア探究』へと再編し、地域での実践などをより強化することにしました」と話す。

### 郷土探究を主軸に多彩な体験学習を重ね 6カ年計画で「探究」の実践と深化を図る

2019度の「グローバルフォレストピア探究」は、2学年まとまりでテーマを設定し、段階を経ながら6年間を通じて探究を深めるカリキュラムとした。各ステップと具体的な活動内容は以下の通りである。

#### ◆1・2年次：テーマ「郷土探究」

##### →発見・立問のステップ

1年次の「郷土探究1」（年70時間）は、地域（県北5町村）の自然・文化・歴史を学ぶ。田植え、用水路巡り、茶摘み、稲刈り、脱穀、竹細工、餅つきなどを体験し、成果をまとめて、3月に研究発表を行う。

2年次の「郷土探究2」（年70時間）では、野菜づくりなどの農業体験のほか、ヤマメの採卵や、鶏をさばき食す体験を通して、生命と産業のつながりを学ぶ。

#### ◆3・4年次：テーマ「実践探究」

##### →実践・深化のステップ

3年次の「実践探究1」（年70時間）は、1・2年次の体験学習を基に、生徒各自が地域の中で、自分にできること、チャレンジしたい探究課題を見つけ、具体的なアクションを起こす「マイプロジェクト学習」（後述）に取り組む。4～5月の特別講座などを通じてテーマを設

(注1) 五ヶ瀬町ホームページより

(注2) 五ヶ瀬中等教育学校ホームページによると、2018年度に在籍する生徒は229名で、県内出身者が218人、県外出身者が11人となっている。宮崎県の26市町村のうち、23市町村から生徒を受け入れている。



定し、6月以降は個々のテーマについて探究を深める。

4年次の「実践探究2」（2単位）では、3年次に自分が実践したことに対する問題点を見出すことで、さらに探究のアクションを深めていく。3月に研究発表を行う。

#### ◆5・6年次：テーマ「普遍探究」

##### →探究・表現のステップ

5年次の「普遍探究1」（2単位）は、1～4年次に体験・実践した内容について、1年間をかけて、調査・分析・考察。個人のテーマに基づいて探究活動を繰り返すことで問いに迫り、成果をまとめる準備期間とする。

6年生の「普遍探究2」（1単位）では、5年次の考察を基に論文を作成。6年間の学びの集大成として生徒の論文集を冊子としてまとめるとともに、地域住民に向けた発表会を行う。

### 3年次の「マイプロジェクト学習」を通じて 地域の課題に対して当事者意識を持つ

「グローバルフォレストピア学習」から「探究」へと移行する中での最も大きな変化は、「実践」をより重視したことにある。中でも、3年次の「マイプロジェクト学習」に特に力を入れている。認定NPO法人カタリバが主催する「マイプロジェクト」に着想を得たプログラムで、指導方法などについてはカタリバのアドバイスを受けた。グループ研究ではなく、生徒個人が探究したいプロジェクトに取り組むこと、テーマ設定だけでなく、生徒自身が地域の中からプロジェクトの協力者を探し出して依頼することなどが特徴の、意欲的な試みである。導入の狙いについて上水先生は次のように語る。

「2018年度までは、SDGs<sup>(注3)</sup>などをテーマとした探究活動としていましたが、内容がアカデミックになる一方で、生徒の当事者意識が薄れているのではないかと。学校の学びと地域の実態の間に乖離があるのではないかと。そんな反省がありました。探究の学びとはリアルな経験の積み重ねであり、生徒にもっと当事者意識を持たせることが大切だと思い、生徒各自が地域とつながるアイデアや、地域でやってみたいことを、思い切って好きにやらせてみようと考えました。

生徒のアイデアには甘いところも少なくありませんが、実際に行動を起こしてみても初めて見えてくるものが多々あります。例えば、アイデアを実現したり、地域の人の

協力を得たりするためには、熱意はもちろん、背景となる知識や、相手を説得するための論理性、裏付けとなる数値的データも必要だと気づくでしょう。それが教科の学びに向かう意欲や、学術的な好奇心につながっていく。そのため、『ひとまずやってみる』ことはとても大切だと考え、マイプロジェクト学習を推進しています」（上水先生）

「マイプロジェクト学習」の例をうかがうと、五ヶ瀬中等教育学校の生徒ならではのものが挙がる。

「例えば、五ヶ瀬・高千穂・椎葉山地域で生産されている、『釜炒り茶』という特産品をPRするプロジェクトがあります。古くから伝わる窯で炒る製法が特徴で、非常に香りの良い日本茶なのですが、福岡県の八女茶や佐賀県の嬉野茶などと比べて知名度が低く、あまり県外では購入されていないという課題を抱えています。そこで、『釜炒り茶』の魅力をもっと知ってもらおうと、生産農家の協力を得て、このお茶を使ったお菓子づくりに取り組んでいる生徒がいます。1年生のときの『郷土探究』で体験した茶摘みからヒントを得たそうです。

ほかにも、インターネットを活用して、隣町の高千穂町の伝統芸能『高千穂神楽』の魅力について全国に発信している生徒もいます。上水先生がおっしゃったように、こうしたアクションを起こす過程で生徒たちは失敗も成功も経験しますが、リアルな壁に向かい合う経験が、将来を生き抜くための力につながるのではないかと期待しています」（鈴木先生）

4年次以降の「グローバルフォレストピア探究」では、「マイプロジェクト学習」で取り組んだテーマをさらに深めたり、表現したりする活動が中心とする予定だ。

### 寮生活を通じて対話を重ね 生徒の興味・関心を発見し探究を深める

「グローバルフォレストピア探究」を充実させるため、教員はどのような点を大切にしているのか。

「私たち教員も地域に対して当事者意識を持つことを心がけています。地域の人たちから見れば、生徒同様に教員も五ヶ瀬町という地域に身1つでやってきた『よそ者』です。教員がまず住民として地域に深く関わらなければ、地域の方々の協力を得ることはできません。一方で、しっかりと地域と向き合えば、地域の方々とは異なるアイデアを持つ『外の血』として受け入れていただけるよう

(注3) SDGs：「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略。2015年9月の国連サミットにて示された、2030年までに持続可能でよりよい世界をめざす国際目標。

に感じます。私は2018年に本校に赴任したのですが、五ヶ瀬町の住民が、本校の生徒や教員をあまり抵抗なく受け入れてくれることに驚きました。非常にフレンドリーで生徒の取り組みにも協力的なのですが、生徒がアイデアを持ってご意見をうかがいに行くと、考えが甘い場合はしっかり指摘して下さいます。生徒を大人として扱っていただいていることの表れだと感じています。さらに、『こんなアイデアを実現できないか』と、学校に相談に来られる地元の生産者の方などもおり、非常に良い関係が築かれています」(鈴木先生)

教員と生徒が日常的に対話することも大切である。五ヶ瀬中等教育学校の場合は、全生徒が寮生活を送り、教員もハウスマスター(勤務時間が午後から22時頃までの教員)6名に加え、毎日3名の教員が宿直勤務する。寮に泊まる機会を通して生徒たちとのコミュニケーションが深まり、それが個々の興味や適性を発見したり、探究を深めたりしていく上で好影響を与えているという。

「宿直勤務は持ち回りで、全教員が月に2～3回、寮に泊まり込むこととなります。寮では生徒と共同生活を送ることとなりますし、毎晩の点呼の際などには一人の『人生の先輩』として、または同じ五ヶ瀬町の住民として、人生観など授業などにとどまらない幅広い話をしています。そこで、教える側と教わる側という関係ではない『ナナメの関係』を築くことができます。グローバルフォレストピア探究がうまく回っている背景には、教員と生徒が対話的な関係を築いていることがあると思います」(鈴木先生)

「寮生活は本校の教育活動の根幹を成しています。生徒たちは、例えば洗濯機を使う順番や干す場所、寮内の消灯時間など、『リアルな課題』に数多く直面します。日常的に他者と意見を調整しながら課題を解決する経験を積むことが、グローバルフォレストピア探究のさまざまな活動にも生きていますと考えています」(上水先生)

### 探究をキャリア教育に連動させ

#### 「人生のストーリー」を描くことをめざす

教員同士の連携も大切だという。

「本校は教科や学年による壁があまりなく、課題があれば共有し、みんなで協議することができます。そのため、異動などで教員が入れ替わっても、教員同士でサポートしあいながら、自然と指導が継承できていると感じます。私自身、前任校ではあまり探究に取り組んでい

ませんでした。探究を中心とした本校の指導にもほぼ問題なく加わることができました」(鈴木先生)

上水先生も、次のように言葉をつなぐ。

「開校以来から取り組み、多数の卒業生を輩出してきてことで、探究を通じた生徒の成長の具体的なイメージを持ちやすいことも、本校の指導を継承する上での利点だと思います。また、地域の人々との関係に加え、地域が有する文化の深さや歴史的厚みも、本校の探究活動を支えてくれています。棚田の風景ひとつとっても、なぜこの町でこんなにも稲作が栄えてきたのか、とか、山間の急峻な地形と自然の関係など、学術的にも非常に興味深く、中山間地域だからこそ見つかる、探究の素材がいっぱいです」(上水先生)

最後に、今後の目標について聞いた。

「探究をキャリアにどのように連動させるかが、今後の課題だと考えています。生徒自身が、社会の一員として自分は何をできるのか、もっと踏み込んで考えられるようなものにしたい。そして、本校での経験が大学進学後の学びや社会で取り組む課題につながっていく、『人生のストーリー』を描くような活動にしていきたいと考えています」(上水先生)

### 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

◇所在地：宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字三ヶ所9468-30

◇沿革：1994(平成6)年 宮崎県立五ヶ瀬中学校・宮崎県立五ヶ瀬高等学校として開校  
1999(平成11)年 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に校種変更  
2014(平成26)年 文部科学省「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」指定  
2019(平成31)年 文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」指定

◇学級編成：[全寮制] 各学年普通科1クラス

◇生徒数：224名(2020年1月現在)

◇特色：教育目標に「眼(まなこ)を世界に開き未来を切り拓く、創造性豊かで主体的に生きる人間の育成を図る。」を掲げる男女共学の中等教育学校。1学年40名の全寮制。中学校に相当する1～3学年を前期課程、高等学校に相当する4～6学年を後期課程と位置づけ、6年間を見通した教育活動を展開している。

◇卒業生の進路：2019年3月卒業生39名

- ・進路：4年制大学30名、短期大学1名、その他8名
- ・合格者の内訳(過年度卒生を含む・延数)：国公立大26名、私立大18名、海外の大学1名、短期大学1名、専門学校・各種学校2名